

ニューズレター

6月1日に行われた設立10周年記念イベントの様子



自然の音をモチーフにしたジャズコンサート



ノネズミの生体観察



青空教室の様子



青空教室 昆虫講座



CONTENTS

- 生物多様性センター設立10周年を迎えて P1~P3
- いきものみつけ~100万人の温暖化しらべ~ P4
- 自然環境保全基礎調査について P5
- モニタリングサイト 1000サイト P6~P7
達成しました!
- 「生物多様性まつり2008」を P8~P9
開催しました
- 生物多様性センターの見学について P9
- センターの出来事 P10~P11
- 標本の紹介(第15回) P11

生物多様性センター設立10周年を迎えて

本年6月に生物多様性センターは設立から10年目を迎えました。発足当時は総勢13名だった職員も今では19名にまで充実し、自然環境保全基礎調査やモニタリングサイト1000の推進、標本資料の収集管理、情報の発信、普及啓発といった各種業務に取り組んでいます。また、今年度からは、アジア太平洋地域の生物インベントリーづくりに貢献する事業にも着手し、国際的な役割も担えるよう更なる充実を図っているところです。

本号では10周年特集記事として、センターの開設準備に携われた当時の池田総括企画官(現中国四国地方環境事務所長)に設立への思いや苦労話について執筆いただきました。また、6月に開催した記念行事やセンターがこれまでに実施した自然環境調査の目録の作成についてもご紹介します。

生物多様性センター胎動期の頃 池田善一(中国四国地方環境事務所長)

はじめに

生物多様性センター設立10周年おめでとうございます。当時多様性センター設立にかかわった者の一人として、過去の記憶をたどりながら設立当初の様子などを綴ってみたいと思います。

生物多様性センター(以下センターという)の新設は、当時計画課にあった自然環境調査室の仕事で、私は調査室の一員として担当しました。平成8年4月調査室に配属された時点では、前年度補正予算で建物の設置が認められ、既に山梨県への立地が決まり、建物の実施設計はほぼ終わっていました。

私の役割は専ら山梨県に施行委任された工事の進捗状況の監督で、アカマツ林の状態から完成に至るまで見届けることができました。

生物多様性センター構想

生物多様性のナショナルセンターを作るという発想は、生物多様性条約が発効した平成5年頃からあり、平成6年から生物多様性調査、情報システムの検討が開始されました。また学識者による検討会を設置し、21世紀を展望したスタッフ100名規模の東アジアの中核拠点をつくるという構想が検討されました。平成7年度補正予算では23億円のハコモノを整備するという位置づけのみであり、どのような組織体で運用するのか、そもそも組織が認められるのかは全く未知数でした。センターの意図するところをどのように現実のハコモノの中に落とし込んでいくのか悩んでいたところ、菊地邦雄氏が審議官時代に書き残していたセンター要求に至る経緯と考え方に関するメモを見つけて、その後事業を進めていく上で大いに助かったことを覚えています。

富士吉田分室から開所式まで

建物もほぼ出来上がり、組織設置も4月に控えた平成10年1月先発部隊として私と柳田敏久氏、国土地理院出向組の大塚孝治氏の3人で仕上げ工事途上のセンターに乗り込み、開業に向けた準備を始めました。

4月の組織発足に向けて、机、書棚、什器等備品の購入・レイアウト・配置、コンピュータシステムの設置、LAN配線、情報システムの仮運用、4月に来る職員の宿舍確保(環境庁初めての借上げ宿舍方式の導入)などの諸準備を済ませました。4月9日に浅野能昭センター長始め、環境庁プロパー、国土地理院出向者、山梨県出向者、(財)自然環境研究センター派遣職員らからなる総勢13名の体制でスタートしてからは、6月からの本格的開業、開所式に向けて、情報システムの最終調整、展示室の完成、パンフレット作成などを行い、6月24日に山本公一政務次官、天野建山梨県知事を迎えて盛大に開所式を行うことができました。

新たな植生図の作成

昭和48年から開始された自然環境保全基礎調査に伴い、膨大な量の調査関連資料、原図類が蓄積されていましたが、その大半は新宿御苑旧事務所の床に田村剛先生の著作類とともに積まれていました。センターを整備することでやっこのような貴重な資料が適切に保管できたわけです。

基礎調査の基幹といえば全国の植生図の整備ですが、平成11年からスタートする第6回基礎調査で最初に作成されてから20年近くを経た植生図を更新することになりました。国立公園の現場経験から5万分の1スケールでは余り役に立たないと従来から感じており、更新するなら次は2万5千分の1スケールでやりたいと思っていたため、新スケールで予算要求しました。平成11年は環境庁悲願の環境影響評価法が施行される年であり、植生図はアセスメントの根幹情報となることから予算折衝ではこの点を最大限アピールしました。アセス法の施行という絶好の追い風がなければ、植生図の新たな更新はもっと遅れていたかもしれません。

NORNAC

自然系研究者のネットワーク強化という課題は構想段階からあり、また、自然系研究機関もまだ数が少なく、公害系研究機関のような全都道府県に設置されて全国組織もあるという体系がありませんでした。センター設置を契機に自然系のネットワークの形成に向けてその役割が期待される場所となり、隣接する山梨県環境科学研究所と国立環境研究所にまず声をかけ、平成10年11月国と道県設置の機関で構成する自然系調査研究機関連絡会議(NORNAC)を発足させることができました。当面その性格は独自の予算を持たずに、メーリングリストなどを活用して情報交換、研究交流を主体に行う緩やかなネットワークとしました。今年11月にNORNAC第11回会合が岡山(岡山県自然保護センター)で開催されることに何かしら縁を感じています。

生物多様性を伝える展示

いったん出来上がった展示の更新はなかなか難しいものですが、オーディエンス・リサーチを実践し、展示の改善、リバイスを極力行うよう努めました。例えば当初の展示はどちらかというと大人向けでしたが、開業してみると小さな子供連れの利用も多いことから小学校低学年でも楽しめる展示を追加しました。一つは生物多様性に関するQ&A装置で、正答数が多いと記念バッジがもらえるようにしたため、子供たちには一躍大人気のコーナーとなりました。もう一つは映像シアターでの映写プログラムの追加であり、小さな子供たちに生物多様性や生態系の意味を伝えようと試みたものです。このため生物進化と食物連鎖の「食」を主軸に子供でも理解できるようシナリオを組立てました。

おわりに

「生物多様性」という言葉はメディアでも最近よく見かけるようになりましたが、当時は一般の国民にはほとんどなじみのないものでした。まずは生物多様性を冠した名称の機関が設立されたことを広く知ってもらうことが肝要であると考え、その一環としてロゴマークとポスターの製作を行いました。米国スミソニアン自然史博物館のポスターから着想を得て、展示のイラストを担当した永田信行氏にお願いして、日本の生態系をまるごと凝縮した絵を描いてもらいポスターに使用しました。この「日本いきもの宝島乃景」の絵がセンター設立10周年の今年、偶然にも鳴下一郎前環境大臣の目に留まって、6月に神戸で行われたG8環境大臣会合の背景に使用されたと聞き、感慨深いものでありました。

2010年には生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が日本で開催されることになっています。国内のみならず世界に対して日本の生物多様性センターのプレゼンスを高めるよい機会であり、センター職員の皆様のますますのご健闘をお祈りし、大きな成果を期待しています。



建設中のセンター(平成9年10月1日)



開所式の様子

設立10周年記念行事を開催しました!

センター設立10周年を記念して、環境月間の初日である6月1日に10周年記念行事「生物多様性ってなんだろう～五感で感じる日本の自然～」を開催しました。第1会場である河口湖ステラシアターでは、講演会「ヤマネに恋して」(講師:やまねミュージアム館長:湊秋作氏)や座談会「何が起こるかわからない…団塊の世代、自然を語り、自然を奏でる」(動物学者:千石正一氏、ミジンコ研究家:坂田明氏、音楽家:佐藤允彦氏、アロマセラピスト:大橋マキ氏)、コンサート「自然の音でジャズしてみよう」(ピアノ:佐藤允

彦氏、アルトサクソ:坂田明氏、ベース:加藤真一氏)が行われました。また、第2会場である生物多様性センターでは、青空学校(講師/哺乳類:土屋公幸氏、鳥類:箕輪義隆氏、昆虫類:岸本年郎氏、動物全般:千石正一氏)や山梨県に生息するネズミ類の観察コーナー、写真展、鳥の絵画教室など様々なプログラムが実施されました。日頃、なかなか意識することのない生きものや自然について、この日ばかりはじっくり考えることができたのではないかと思います。

「自然環境調査目録」をつくりました!

生物多様性センターでは、設立10周年の節目を迎え、前身である自然保護局自然環境調査室の時代からこれまでの間に取り組んできた各種調査の目録を作成しました。昭和48年度から着手した自然環境保全基礎調査や平成15年度から始まったモニタリングサイト1000の平成19年度

までの調査を主に「生物」、「環境」、「生態系」の3つのタイプに分類し、それぞれについて概要を掲載しています。また、その他関連する調査についても触れています。ホームページ上でも公開しますので、是非、楽しみにしてください。

いきものみつけ～100万人の温暖化しらべ～

生物多様性センターでは、今年の7月から温暖化による身近ないきもの等への影響を調べる市民参加の調査「いきものみつけ」をスタートしました!参加方法はカンタンなので、ぜひご参加ください。



いきものみつけ
www.mikke.go.jp

いきものしらべにチャレンジしましょう!

秋冬編

いきものしらべてなに?

いきものしらべは身近な場所でみられる「いきもの」についてみんなで調べる調査です。調査する「いきもの」を見つけたら、その日付や場所などの情報をみなさんに送ってもらい、集まった情報をもとに「いきもの」地図を作成します。



どこでしらべるの?

全国どこでもOKです。毎日通る道や公園、庭先など、身近にある自然に目を向け、耳をすましていきものを見つけてください。



何をしらべるの?

これからの季節は「イチョウの黄葉日」、「初氷の観察日」、「ジョウビタキを初めて見た日」を調べます。下の写真と調べることをヒントにして、みつけた日付と場所(都道府県名と市区町村名)、みつけた場所の環境(都市・農村・山・海辺・川/湖沼)を記ろくしてみましょう!

※「その場所ではじめて見た日」を調べるので、1つの場所で1回の報告しかできません。でも、いろいろな場所のデータがほしいので、場所(県や市町村)がちがうなら、何回でも記ろくしてね!

みつけた!



1本の木をみて、大部分の葉が黄色に変わり、緑色がほとんどみられなくなった日



イチョウ

今年、初めて氷が張るのをみつけた日

※池や水たまりなどの水面に張る氷を観察してね。庭などに水を入れたバケツを出して観察してもいいよ!



初氷

今年、初めてジョウビタキをみつけた日

スズメくらいの大きさだよ!



ジョウビタキ

「みつけ!」報告(ほうこく)のしかた

FAX/郵送による報告ができます。ハガキや紙にみつけたいきもの名前や日付、場所やその環境などの必要事項を書いてお送りください。

●インターネットを利用できる人は「いきものみつけ」のホームページからも報告できます。

(URL:<http://www.mikke.go.jp/>)

送付先

- FAX: 03-3568-4132
- 郵送: 〒106-0041 東京都港区 麻布台 1-11-9 ダヴィンチ神谷町 JCCCA内 「いきものみつけ」事務局

自然環境保全基礎調査について

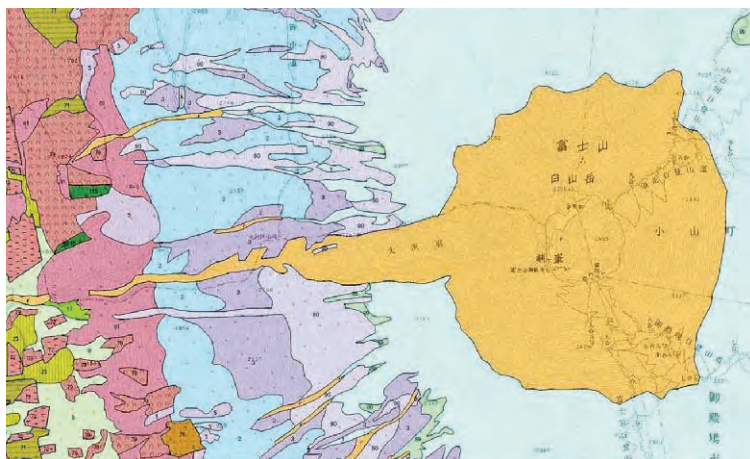
1 植生調査

当センターでは、縮尺2万5千分の1の全国植生図の整備を、平成12年度より継続して実施しています。詳細な植生図の作成は、通常であれば非常に手間と時間がかかる作業ですが、当センターでは、空中写真や人工衛星画像等を利用して作業時間の効率化を図りつつ、可能な限りの現地調査結果を反映させることにより、精度が高い植生図作成を実現しています。

今年度は、道央地域(北海道ブロック)、三陸海岸(東北ブロック)、房総半島西部(関東ブロック)、伊豆半島南

部(中部ブロック)、尾張三河地域(中部ブロック)、鳥取西部(中国・四国ブロック)、屋久島及び琉球列島(九州・沖縄ブロック)の7地域の整備を予定しています。これにより沖縄県については、無人島を含むすべての地域の植生図が整備されることになり、結果として全国の約44%の地域の整備が終了することになります。なお、昨年度までに整備済みの植生図については、「第6・7回自然環境保全基礎調査 植生調査情報提供HP

(<http://www.vegetation.jp/>)」にて閲覧できます。



「大沢崩れ周辺の植生図」
標高と地形の違いを反映して、植生が異なっている様子が分かる。

2 特定哺乳類生息状況調査

近年、シカやイノシシ等の中大型哺乳類による人里への出没が増加するに伴い、農林業や生態系等への被害増加が大きな社会的問題となっています。シカによる自然植生への食害については全国的に深刻化しており、今秋には、南アルプス仙丈ヶ岳のお花畑にまでシカ防護柵が設置されることになりました。富士山の中腹に位置する当センター周辺でもシカが増加しているようで、夜間にシカの群れが道路に出てきていることも多く目撃されています。車の運転には注意した方が良さそうです。

これらの中大型哺乳類について科学的知見に基づく適切な保護管理施策を講じるため、全国レベルでの生息状況及び個体群動態を迅速かつ的確に把握することを目的とした「特定哺乳類生息状況調査」を、今年度より3か年計画で実施しています。本調査の対象は、定期的に農林業や生態系等へ被害を及ぼすおそれのある中大型哺乳類5種(ヒグマ、ツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンザル、イノシシ)としており、生息情報の収集、生息環境の把握、生息

密度・個体数推定調査を実施し、現地調査と既存生息情報の詳細な解析を行いつつ、平成22年度には対象哺乳類の全国における推定生息個体数を発表することを予定しています。



ニホンジカ



イノシシ

モニタリングサイト 1000サイト達成しました!

生物多様性センターでは、自然環境保全基礎調査と併せて、平成15年度から、モニタリングサイト1000(正式名称:重要生態系監視地域モニタリング推進事業)を開始しています。自然環境保全基礎調査が全国の自然環境の現状や改変状況を調査しているのに対して、モニタリングサ

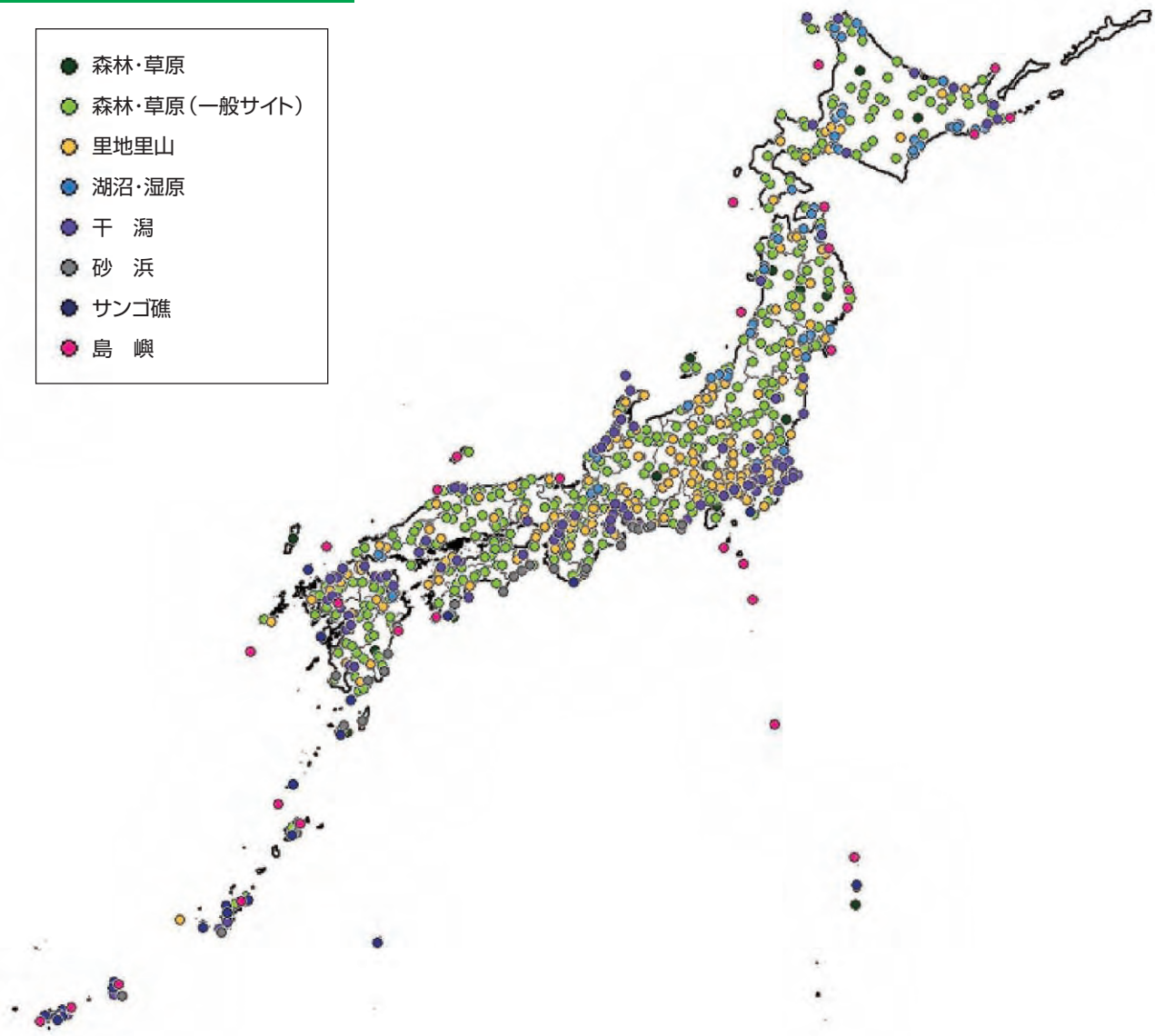
イト1000は様々なタイプの生態系の状態を定量的、長期的にモニタリングしています。調査項目及び手法の検討、試行調査等を進め、現在までに、合計約1000箇所のモニタリングサイトを設置することができました。

各生態系における主な調査項目

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ○森林・草原・・・毎木調査、落葉落枝調査、陸生鳥類調査 ○里地里山・・・植物相調査、水環境調査、指標種調査 ○湖沼・湿原・・・ガンカモ類調査 | <ul style="list-style-type: none"> ○干 潟・・・底生生物調査、シギ・チドリ類調査 ○砂 浜・・・ウミガメ調査 ○サンゴ礁・・・サンゴ被度調査、オニヒトデ調査 ○島 嶼・・・海鳥調査 |
|--|--|

モニタリングサイト一覧

- 森林・草原
- 森林・草原(一般サイト)
- 里地里山
- 湖沼・湿原
- 干 潟
- 砂 浜
- サンゴ礁
- 島 嶼



平成19年度までの第1期では、全体の枠組みの構築、調査項目及び手法の検討、調査サイトの設置、試行調査等を実施しました。平成20年度からの第2期では、本格調査を開始します。

また、平成20年度は、第1期の調査結果を取りまとめるため、モニタリングサイト1000の各生態系調査で解析ワーキンググループを設置しています。森林・草原調査では、地

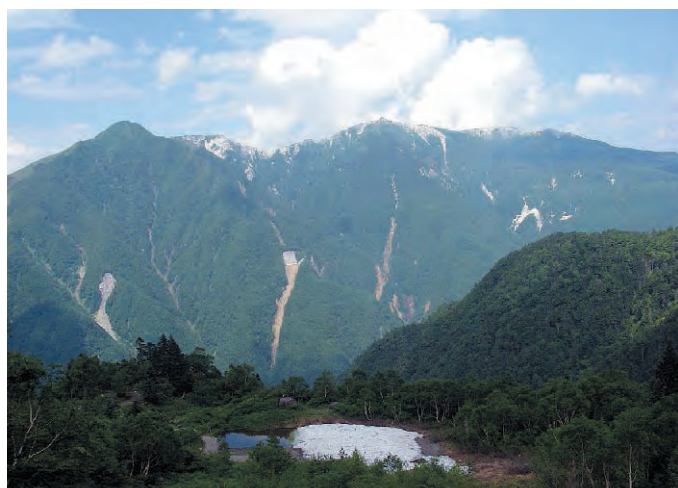
球温暖化で衰退が予想されるブナについてサイト間で成長速度を比較すること、サンゴ礁調査では、各サイトによって最良時のサンゴ被度が異なることから、最良時からの相対的な被度を被度指数として評価すること等が話し合われました。第1期の解析結果は、平成22年に名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議等の機会に広報していく予定です。

1 里地一般サイトを決定しました

里地里山生態系では、昨年の12月から今年の2月にかけてボランティアで調査を実施していただく一般サイトを募集しました。当初の想定を超える応募があり、181箇所のサイトについて一般サイトとして登録していただくことになりました。一般サイトでは、9つの調査項目(植物相、中・大型ほ乳類、鳥類、水環境、人為的インパクト、カヤネズミ、カエル類、チョウ類、ホタル類)から1つ以上の調査項目について調査をしていただきます。181の一般サイトは、北は北海道から南は沖縄まで、日本全国に分布しています。順次開始される一般サイトでの調査により、里地調査もますます充実し、より全国的な変化を捉えることができるようになると思っています。



2 高山帯調査の検討を開始しました



南アルプス(北岳)：南アルプス自然保護官事務所 提供

地球温暖化の影響に対して脆弱な高山帯の調査を開始するため、本年度から検討をはじめました。8月8日に第1回検討会を開催し、本調査で扱う高山帯の範囲、高山生態系の課題の整理、調査対象、調査サイトの選定基準等について討議しました。その結果、本調査ではハイマツ帯を含めて高山帯とすることと決定され、地球温暖化に加えてニホンジカによる食害や酸性降水等の影響も重要な課題であること、典型的な高山帯の他に特殊岩地等に成立する高山生態系も重要であることなどの意見がありました。本年度は第3回まで検討会を開催し、来年度から試行調査を実施する予定です。

*モニタリングサイト1000に関する最新の情報は、

生物多様性センターホームページ(URL:<http://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html>)でご覧になれます。

「生物多様性まつり2008」を開催しました

「生物多様性まつり」は、毎年多様性センター主催で8月上旬に開催している恒例のイベントです。今年は8月10日(日)に開催しました。今年の「生物多様性まつり」は、「探して!気づいて!いきものみつけ」をテーマに、生物多様性を知り、自然を観察してもらうきっかけの提供を目的とし、展示や参加型プログラムの内容を工夫しました。

企画展示「探して!気づいて!いきものみつけ」では、「昆虫の生態(季節変化・時間変化)」「シラスの中の多様性」「バードウォッチング入門」「足あと観察」「ミクロの世界をのぞいてみよう」という5つのコーナーで、身近な生き物の観察方法と、生き物の生態を観察できる展示を行いました。「シカの歩幅って小さい!」という声や、生き物の生活をそのまま持ってきた「アリの巣」や「ハチの巣」の展示から離れられないお子さんたちがいました。また、環境省が今年から始めた「いきものみつけ」を紹介する展示も行いました。



「紙で作ろう!いきものなかま」
手作りの紙芝居は大人気でした。

小さいお子さん向けのプログラム「紙で作ろう!いきものなかま」は、自分オリジナルの生き物を紙で作成し、さまざまな生態系を描いた絵に貼りつけてもらう展示でした。職員手作りの紙芝居の上演もあり、熱心に見入っているお子さんや、幾つもの生き物を作成しているお子さんで楽しいコーナーとなりました。

「鳥観察バッジ」は、写真の鳥を観察して、用意された型に彩色しバッジを作成するコーナーです。直径5cmほどの型に30分近く取り組まれ、細かい羽の色の变化まで表現されている方もおられました。作成したバッジは持ち帰ることができることから、多くの方々にご参加いただき

夏の観察対象であるセミの紹介(ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、クマゼミ)や秋の観察対象の紹介(ヒガンバナ、イチヨウ、ススキ)、温暖化意識しらべ(アンケート)をお願いしました。

「飛ぶ種をつくろう!」は、大学生のインターン生による展示で、色々なかたちの空を飛ぶ種について解説をしました。折り紙等で植物の飛ぶ種の模型を作成し、センター大会議室前の吹き抜け階段より飛ばすこともでき、種のユーモラスな動きに、歓声があがっていました。

富士山の生き物を知りたいとのご要望にお答えし企画された「FUJIアリウォッチング」は、昭和大学の萩原康夫先生にセンター周辺で見られるアリの講義・観察をお願いしました。参加者の方々は、顕微鏡・ルーペ・ピンセット・シャーレを駆使して、センター中庭にて採取したアリを同定できるようになりました。



「飛ぶ種をつくろう!」
かたちによって飛び方の違う種をつくりました。

ました。

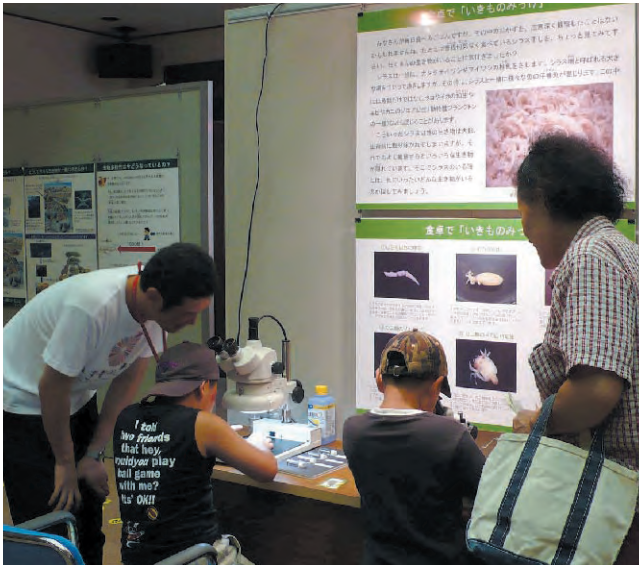
毎年多くの申込みのある「昆虫標本づくり」では、クワガタなどの標本作成に挑戦していただきました。例年より少々小型の難しい個体でしたが、講師の先生にコツを教えてもらいながら、皆さん無事標本作成を習得し「修了書」を獲得されていました。

「標本収蔵庫ツアー」では普段一般公開されていない収蔵庫を、年に1回のまつりの当日のみ、皆様に見学していただくごとと実施しています。食べ物として身近な「ワカメ」「ヒジキ」の標本をはじめ、「オケラ」「ギンヤンマ」などの昆虫、さらに国の天然記念物である「ヤマネ」や絶滅のお

そのある「シマフクロウ」「オジロワシ」など様々な生き物の標本を見ていただきました。普段、間近で見ることのできない生き物に皆さん興味津々のようでした。また、ツアーをより楽しんでいただくために、今回は「動物と植物の違いを4つ考える」「いろいろな昆虫が何の仲間か選んで答える」という2問のクイズを用意しました。引っ掛け問題をふんだんに盛り込んだ昆虫の問題では、チョウの一種だと思っていたものがトンボの仲間だったり、カマキリの一匹だと思っていたものがカゲロウの仲間だったりと皆さん答えを

知るたびに「えー、そうだったの!」という驚きの声をあげていらっしゃいました。

今年も、多くの方々にご参加いただき、盛況のうちに終わることができました。「自然やいきものの観察」というと取っ付きづらい印象を受けてしまいますが、今回のイベントで、身近なところにも「生物多様性」がたくさん隠れていることを知っていただき、「生物多様性」に目を向けるきっかけになってもらえたらと思います。生物多様性まつりは来年も開催予定です。ご期待ください。



「シラスの中の多様性」
食卓の中にも生物多様性を見付けました。



「FUJIアリオウォッチング」
野外での講義の様子

生物多様性センターの見学について

生物多様性センターの業務のひとつに、「生物多様性」の普及啓発があります。そのため、センター内に常設展示室を整備し、一般からの「自由見学」と「解説付き見学(団体・要予約)」を受け入れています。

そして、生物多様性、地球温暖化による生き物への影響、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)、環境省の仕事とは等、少々難しく堅苦しい話を皆様にご理解いただくために、職員一同、展示内容や利便性の向上に努めております。博物館利用の向上を目的とした、山梨県内の100余りの博物館等で組織する「ミュージアム甲斐ネットワーク」にも参加しております。

今年も4月から、小中学校の遠足や修学旅行、環境・動物に関係する協会や団体による見学に加え、環境シンポジウムや市町村の視察、JICA研修など多くの見学がありました。社会の環境への意識の高まりに加え、センターが富士スバルライン沿いにあり交通の便が良い点も、多くの皆様にご来館いただける要因なのでしょう。

今後とも、一層充実した普及啓発活動を目指してまいります。皆様もお近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄り下さい。なお、20名以上の団体による、「自由見学」又は「解説付き見学」を希望される方は生物多様性センター管理科(0555-72-6031)までご連絡下さい。



JICA研修の様子

センターの出来事

1 レンジャークイズが新しくなりました!

常設展示室の「生物多様性保護レンジャークイズ」がリニューアルしました。生物多様性保護レンジャークイズは、生きものや自然環境についてのクイズに答えながら保護レンジャーを目指すストーリーのテレビゲーム型の展示施設で、子どもの来館者に人気のコーナーです。

今回、新しくなったレンジャークイズは、以前のレンジャークイズに比べて、生きものキャラクターやゲームステージを大幅に増やし、変化に富んだものとなりました。ゲームステージは森林や草原、海等、5つの自然環境別に分かれていて、

プレイヤーは様々な環境のステージの中を自由に散策し、そこに生息する生きものと対話したりクイズに答えたりし、生物多様性について、楽しく遊びながら学ぶことができます。センターご来館の際には新しくなったレンジャークイズに、ぜひチャレンジしてみてください。



2 新宿御苑みどりフェスタに参加しました

4月29日(火)晴天に恵まれる中、新宿御苑の新宿門近くの広場で「新宿御苑みどりフェスタ&国立公園フェア」が開催されました。多様性センターでは、国立公園フェアにブースを開き、「生物多様性って何だろう?」をテーマとしたパネルの展示とクイズラリー、土壌動物の観察、生態系環境ジオラマに参加者が考えた粘土細工を置き生態系を表現する「ズックのいきもの王国」の3つのプログラムを実施しました。それぞれのブースは大人気で、一時は行列ができるほどの大賑わいでした。特にクイズラリーでは、正解者の方

への景品(センターオリジナルの昆虫カードや缶バッジなど)が大人気で、みなさん真剣に答えてくださいました。センターでは、今後もこうしたイベントに積極的に参加し、たくさんの方々に「生物多様性」について知っていただけるよう、活動を続けていきます。



3 「2008ほたるサミット下関」に出席しました

平成20年6月20日(金)に豊田生涯学習センター(山口県下関市)において「2008ほたるサミット下関」が開催されました。ほたるサミットは、平成元年に環境庁(当時)が選定した「ふるさといきもの里100選」のうち、ホタルの里として選定された市町村の代表者が、「日本一のホタルの里」を目指し、美しい自然環境の保全、ホタルを通じた活力ある故郷づくり等について情報交換をするために発足し、今年で20回目となります。

豊かな人里を象徴し、良好な水辺の指標となる生き物であるホタルは、モニタリングサイト1000などの生物多様性センターの各種事業とも関係があり、毎回サミットには、生物多

様性センター職員が、助言者として招待されております。

今年の開催地となった下関市(旧豊田町)は、町全体で昭和中期から環境保全に力を入れてきた歴史があり、豊田ホタルの里ミュージアムやホタル船など素晴らしい成果を示されています。今回のサミットでは「下関市ほたるマスター検定」も行われました。

ホタルは、人気のある生き物であり、また環境保全活動のシンボリックな存在であることから、逆に、安易な放流活動による遺伝子の攪乱等が問題となっております。今回のほたるサミットを通じ、ホタルをはじめとする生き物と人の良い共存関係が築かれることにつながっていくことが期待されます。

4 第21回巨木を語ろう全国フォーラムが開催されました

7月5日、秋田県仙北市角館町で第21回巨木を語ろう全国フォーラムが開催されました。当日は、全国から会場一杯となる約200名の会員の方々や、あきた山の学校代表の藤原優太郎氏による基調講演の後、4人の方々から秋田の巨樹や豊かな森の保護活動に関する報告がなされました。また、翌日は3つのコースに別れ、巨木巡りが

行われました。来年度は、鹿児島県蒲生町で10月10、11日に開催される予定です。



5 インターン生の受け入れ

生物多様性センターでは毎年夏にインターン生を受け入れています。今年は8月4日から10日までの1週間、関西学院大学と山梨大学から計9名の学生を受け入れました。研修は実際の業務を手伝うことで、センターの役割や生物多様性について身をもって学び、考える場となっています。特に今年は前述の「生物多様性まつり」のひとつのブースをインターン生にお任せし、企画を練る段階から制作、当日の運営までを行っていただきました。限られた時間の中での慣れない課題でしたが、皆さん計画的に作業をすすめ、出来上がった「飛ぶ種をつくろう!」ブースはお客さんに大好評でした。インターン生にとっても、良い経験になったのではないかと感じています。



インターン生が作成した展示物

多様性センターに収蔵している標本の紹介 第15回



和名/ヤンバルクイナ
 RDBカテゴリー/CR(絶滅危惧IA類)
 学名/*Gallirallus okinawae*
 英名/Okinawa Rail
 分類/ツル目クイナ科

やんばるの森にのみ 住んでいる珍しい鳥

ヤンバルクイナは、沖縄本島北部のやんばる(国頭村、大宜味村、東村)にのみ生息している貴重な鳥で、『絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)』において「国内希少野生動植物種」に指定されています。学術的には1981年に新種として記載されました。この大型新種の発見は、ほとんど飛べないという特異な生態もあいまって、当時は大きな話題になりました。その後の調査により、生息域が1985年~2003年の間に40%減少し、その南限は10km以上、北上していることが明らかになりました(尾崎、2005)。推定個体数については、1985年で1800羽(環境庁特殊鳥類調査)、2006年では1000羽((財)山階鳥類研究所による調査)という結果が得られています。

減少するヤンバルクイナの生息地

ヤンバルクイナの分布域の縮小と拮抗する形で、ハブの駆除のために導入された外来種のマングースが分布域を拡大しています。1910年の沖縄島南部への導入の記録から80年を経過した1990年には、大宜味村塩屋湾・東村平良を結ぶラインを越え、やんばる地域全体に広がりつつあります。マングースの防除事業等により2000年~2007年までに約9000頭のマングースが捕獲されていますが、その後もマングースの捕獲エリアが縮小する兆しは見えず、マングースの捕食によるヤンバルクイナの個体数の減少や絶滅が心配されています。

多様性センターでの収蔵標本の役割

こうした現状に関する情報を広くお伝えし、学術的な研究を推進するために、当センターでは、ヤンバルクイナ等、国内希少野生動植物種の遺体を標本化し、博物館や教育機関、調査研究機関などへの貸出を行っています。ご関心を持たれましたら、当センターの標本担当までお問い合わせください。



ヤンバルクイナの標本



ジャワマングース



職員による草刈りの様子

みなさんの住んでいる周辺の空き地や道端など、夏になると草がものすごい勢いで伸びてきていませんか。家の庭の草刈りなど毎年苦勞されている人も多いかと思います。生物多様性センターも夏になると、職員が雪掻きで使ったスコップを鎌に、除雪車を草払機に持ち替えて、強い日差しの中総出で伸び放題になった草を刈ります。雪掻きもかなりの重労働ですが、この草刈りもかなり大変です。自生してきたフジアザミやフキなどを残したりと敷地内の植生にも気を配ります。時には残しすぎて、来館した方に「誰も居ない施設かと思った」と言われたりしたこともありましたが、今は、職員ではやれないところは外注しています。職員の草刈りの腕前も上がり、手前みそですが、メリハリのきいた綺麗な状態になっているのではないかと思います。是非、草がまた伸びてこないうちに（勿論いつでも歓迎です。）、見に来てください。職員一同お待ちしております。

センターの動き

- 4/8 ● JICAアフリカ研修
- 4/21 ● JICAエコツーリズム研修
- 4/26 ● モニタリングサイト1000沿岸域検討会
- 4/29 ● 国立公園フェア(新宿御苑にて)
- 5/8 ● モニタリングサイト1000
第1回干潟分科会
- 5/14 ● モニタリングサイト1000
里地調査検討会
- 5/24 ● モニタリングサイト1000
第1回アマモ場分科会
- 5/25 ● モニタリングサイト1000
第1回藻場分科会
- 5/27 ● JICA湿地研修
- 6/1 ● センター設立10周年記念行事
- 6/5 ● サンゴ礁保全行動計画策定委員会
- 6/20 ● 2008ほたるサミット下関出席
- 7/1 ● 「いきものみつけ」開始
- 7/5 ● 第21回「巨木を語ろう全国フォーラム」
秋田大会出席
- 7/23 ● モニタリングサイト1000
森林草原調査検討会
- 7/25 ● 自然環境保全基礎調査
特定哺乳類生息調査検討会
- 7/30 ● モニタリングサイト1000ガンカモ類調査検討会
- 8/3 ● 「いきものみつけ」自然観察会(新宿御苑にて)
- 8/8 ● モニタリングサイト1000高山帯調査検討会
- 8/10 ● 生物多様性まつり2008
- 8/19 ● モニタリングサイト1000
国際連携事業検討会
- 8/25 ● モニタリングサイト1000
陸水域調査第1回湖沼分科会

案内図



発行：環境省自然環境局生物多様性センター

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾5597-1

電話：0555-72-6031 FAX：0555-72-6032

URL：http://www.biodic.go.jp/

※ニュースレターは下記URLからもご覧いただけます。

URL：http://www.biodic.go.jp/center/news/